

第3日目 (6月4日): 石巻及び女川

来日3日目、訪問団は、日赤が医療救護班要員を対象に石巻赤十字病院で開催した「原子力災害対応基礎研修会」の一部に参加し、その後女川地域医療センターを訪れました。

日赤原子力災害対応基礎研修会

訪問団メンバーが参加したセッションでは、個人線量計の使用方法和防護服の着脱方法並びにサーベイメータと個人被ばく線量計の保守方法を学びました。

このセッションでは、防護服の着脱方法が研修者たちに実演で示されました。このセッションは団員にとって、自分で防護服を身に着け、線量測定装置を使う機会となり、そのような装備の使用方法について理解を深めることができました。

団員はケーススタディにも参加しました。研修者を6～8名のグループに分け、各組に2～3名の緊急被ばく医療アドバイザーが割り当てられ、シミュレーション方式のケーススタディを指導します。

研修を修了した記念に、コース終了時には参加証が贈られました。



参加証授与

女川地域医療センター

研修を終えた訪問団は、女川地域医療センター内に併設されている東日本大震災災害資料館に向かいました。この資料館は、2011年3月11日津波襲来時の女川町の様子を伝える写真や報道資料を展示しています。

医療センターの建物の柱に残る浸水の爪痕は、津波が建物内部にまで達する高さだったことを物語っています。センターは女川町を見下ろす丘に位置しているため、ふもとの町で営まれていた人々の生活や経済活動が津波に飲み込まれてしまったことを示しています。医療センターを下った道沿いには、祭壇や吊いの石が置かれていました。



女川原子力発電所

訪問団は次に、東北電力が保有する女川原子力発電所(女川原発)に隣接する女川原子力PRセンターに移動しました。

女川原発が福島第一原子力発電所よりも3月11日の地震の震源に近い位置に建っていることは驚きでした。高い標高に立地している女川原発は、福島第一原発を襲った壊滅的な被害を免れたのです。それはとりもなおさず、地震と津波の危険性について熟慮を重ね、発電所を高い位置に建設し、一般には十分とされていた以上の高さの防潮堤で建屋を防護した結果でした。

PRセンターのガイドの説明によれば、東北電力は、外部電源完全喪失の際も炉心損傷を防止する改良型電力システムによって、女川原発の緊急対応能力をさらに強化する取り組みを進めているということでした。

